（第３種郵便物認可）　日本教育新

子どもとわくわくし保育を創り出す

全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会愛知大会 ㊦ 第１分科会から

「〝やってみたい〟があふれる幼児教育の未来～全国国公立幼稚園・こども園の存在意義の発信～」を研究主題に全国国公立幼稚園・こども園長会（会長＝森山未来・東京都渋谷区立臨川幼稚園園長）などが7月29、30の両日、名古屋市で開催した第73回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会愛知大会。今回は五つの分科会の中から、「子どもと共にわくわくしながら創り出す保育」をテーマとした第1分科会の内容を紹介する。

心動く瞬間を豊かな体験に

三重・鈴鹿市立玉垣幼稚園　子どもの「やりたい」引き出し

三重県鈴鹿市立玉垣幼稚園では、子どもたちが環境に関わる中で「やりたい」と心を動かした瞬間を的確に捉え、思いを理解して支え、遊びや環境を共に創り出していくことで、じっくり遊びに向き合ったり、繰り返し取り組んだりしていくのではと考えた。

そして、それまでの知識や経験を生かして遊び込む過程で経験した全てのことが豊かな体験になるのではないかとして、研究主題を「子どもの心が動く瞬間を豊かな体験に―『やりたい』『したい』『もっとやりたい』を引き出し、共に創り出す保育―」と設定した。

研究を進める上では、「心が動く瞬間」を子どもの動きや遊び方・表情が変わった瞬間、「豊かな体験」を夢中になっていく過程と一人一人が自身の課題を乗り越える経験と捉えた。その上で、子どもたちが遊び込んでいくために、①心が動いた瞬間を的確に捉える②「やりたい」を引き出す環境を構成する③子どもと共に創り出す（子どもの願いに沿った環境の再構成とワクワクの共有）―という三つの視点で日々の保育を見つめることとした。



「子どもと共にわくわくしながら創り出す保育」をテーマとした第1分科会

実践事例として、5歳児の「段ボールハウスづくり」を挙げた。保育室の積み木を他の子が使っていたため、ごっこ遊びで使う家を作りたい子どもたちが「どうしたらいいか」と考え始めたことをきっかけに始まり、卒園まで続いた遊び。

このうち「家の壁を完成させると、今後は三角の屋根を作りたくなった。翌日、一人の子が保護者と共に考えた屋根の設計図を持ってきたことでイメージがより具体的になり、屋根が完成した」という場面について、心が動いた瞬間を「設計図通りにしたら三角屋根が作れるかもしれない」などと捉え、「やりたい」を引き出すため「前日から引き続き取り組める場と時間を保障する」など環境を整え、共に創り出すため「子どもたちの手が届かない部分は、作り方を共有しながら保育者が補助する」などした。

幼児の「発見」への気付き重視

愛知・清須市立西枇杷島第1幼稚園　共に遊びを創造、教育充実

夢中になると興味・関心が広がり、新たな発見や疑問をきっかけにさまざまなことに気付き、遊びを通して学んでいく。こうした幼児の姿を教師（保育者）が理解することで、遊びの充実を図る視点を得られる。

愛知県清須市立西枇杷島（にしびわじま）第1幼稚園では、幼児の「発見」とそのことに保育者が「気付く」ことが重なり合う「出会う場」となることで共に遊びを創造することができ、教育の質も高まり、幼児の成長をより良く支えることができるのではないかと考え、研究主題を「幼児の発見と教師の気付きが出会う場」と設定した。

研究内容と方法は、①幼児が夢中になって遊び、発見や疑問を持っている状態を「わくわく」している姿と捉え、その「わくわく」を幼児の具体的な姿から理解を深める②幼児の「わくわく」する姿を保育者がどのように受け止め、援助すると幼児の主体性が生かされるのか考える③「わくわく」の姿を踏まえ、教育目標「明るく元気なやさしい子」を「幼児期に育みたい資質・能力」の視点から見直す―の三つ。

実践事例としては、「オシロイバナの実」を巡る3歳児、4歳児、5歳児の「わくわく」の捉えを示した。取り組みは、園内に咲いていたオシロイバナを3歳児が見つけて保育者を呼び、それを採って園庭に広げたところから始まった。

5歳児は「オシロイバナの実の中に何が入っているのか」と疑問を持って実を割り、中から白い粉が出てくる様子をじっと見ていた。保育者が粉を手に塗って見せると、「すごい」とわくわくした表情で自分の手を白く化粧して楽しんだ。

保育者は「『自ら試し、発見してほしい』と願い、『割ってみたら』と声を掛けた。子どもたちは爪で割ろうとしたり、踏んでみたりと試行錯誤しながら割った。実の中を見たいという『わくわく感』を持っての試行錯誤や発見が楽しい時間となったのではないか」と読み取った。